２０２２年度

愛知の自治的諸活動と生活指導

（第５８集）

もくじ

Ⅰ　はじめに…………………………………………………… ２

Ⅱ　本年度の研究活動…………………………………………… ２

Ⅲ　研究の内容（実践研究事例）……………………………… ３
　小学校６年生　「こうなりたい!!」という目標に向かって自ら取り組み、
　　　　　　　　　　　　　　　成長を実感できる児童の育成
　中学校１年生　主体的に課題と向き合い、他者と協働し、
　　　　　　　　　　　　　　　よりよい集団をめざす生徒の育成

Ⅳ　おわりに…………………………………………………… １２
　１　明らかになったこと
　２　来年度への課題

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会　自治的諸活動と生活指導部会

２０２２年度　　教育課程研究委員

ブロック推薦　　　　　　　　　　　　　　　　　　◎部長　○副部長

名古屋			尾張			三河		
氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名
◎西尾　盛二	名古屋	東陵中	○小檜山　亮	海部	甚目寺南中	○太田　早織	幸田	中央小
富田　賢一郎	名古屋	本地丘小	志知　佑太	一宮	末広小	小穴　光俊	みよし	黒笹小

第６８～７１次教育研究全国集会リポート提出者

第６８次			第６９次			第７１次		
氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名	氏　名	単組	学校名
神谷　絢香	岡崎	六ッ美南部小	羽根田　知樹	名古屋	平針南小	松下　裕哉	名古屋	千鳥小
鈴木　潤也	豊田	若園中	浅野　和也	西春	清洲中	蟹江　陽平	岡崎	男川小

第 72 次教育研究全国集会リポート提出者　竹田　裕亮（海部・立田南部小）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　皆川　博之（名古屋・名塚中）

Ⅰ　はじめに

本部会では、子どもたちが周りの仲間との間に良好な人間関係を築き、互いに意見を出し合ったり、教え合ったりする中で、どんなことにも意欲的に取り組むことができる力を身につけることをめざして実践に取り組んできた。こうした実践は、子どもたちが学力的な「基礎・基本」を身につけるための土台になっているのではないかと考える。また、本部会では、これまでに「複雑・多様化している現代社会の中で、たくましく生きていく力を育てる」という生活指導の方向性を確立してきた。そして、次のような目標を掲げ、教育研究活動に取り組んできた。

○　複雑・多様化している現代社会の中で、主体的に生きていく力を育てること。
○　集団の中で、民主的行動力を養い、社会性を育て、自治能力を育てること。
○　協働する力を深めながら、一人ひとりの人間としての尊厳を学びとらせること。

しかし、子どもたちを取り巻く状況は、複雑・多様化し、厳しさを増している。その中で、子どもたちの心は大きく揺れ動いている。積極的に周りの子とかかわることができない子、友だちへの気遣いや優しさをうまく表現できない子、素直に人の話が聞けない子のように、よりよい人間関係づくりを苦手にしている子どもが増えているように感じる。それに加えて、暴力的手法で相手を傷つけたり、スマートフォンやＳＮＳの普及により匿名で他人を誹謗中傷したりするなどのいじめや、長期欠席についても、昨今大きな課題として残されている。

わたしたち教員は、学校集団生活での不適応に起因するさまざまな諸問題について、全力で解決していかなくてはならない。そのためには、優しい心、認め合う心、感動する心を子どもたちにもたせ、たくましく生きていく力を身につけさせることが大切である。そして、悩み苦しんでいる子どもたちの気持ちを真剣に受け止め、子どもたちが抱えている問題やその背景にあるものを正しく理解し、支援していかなければならない。

具体的には、わたしたち教員は、まず、子どもたちと確かな信頼関係を築かなければならない。その上で、子どもたち一人ひとりのよさを認め、子どもたちが集団の中で「自分は役に立っている」「必要とされている」という気持ちを味わうことができるようにすること、家庭や地域との連携を深めること、子どもたちの心に、周りの人に対する優しさや、思いやりの気持ちを育むことなどが大切であると考える。

本年度は、着実な実践の積み重ねから生まれた成果とこれからの課題を話し合い、「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに実践に取り組んだ。

Ⅱ　本年度の研究活動

2022.4.26　教育課程研究委員全体会〈名古屋市公会堂〉
　　本年度の研究主題「たくましく生きる子どもを育てよう」の決定
2022.8.9　第１回部会〈県教育会館〉
　　研究主題に沿って、小中学校ぞれぞれの研究の３つの柱の確認
2022.9.9　第２回部会〈県教育会館〉
　　研究の３つの柱の確認と県教研分科会の進め方を検討
2022.10.4　第３回部会〈県教育会館〉
　　県教研分科会の具体的な進め方や当日の発表・討論のあり方を検討
2022.10.15　第 71 次教育研究愛知県集会〈愛知県産業労働センター〉
2023.3.3　第４回部会〈県教育会館〉
　　本年度の研究のまとめ

Ⅲ　研究の内容

第 72 次教育研究愛知県集会にむけて

「たくましく生きる子どもを育てよう」の統一テーマをもとに、多数のリポートが提出された。

【小学校部会】リポート数 13 本

課題

（１）子どもの気持ちを大切にし、実態を把握したうえで、よりよい人間関係を築くためにどのような活動を展開していくのか。

（２）心理的な背景や発達段階をふまえ、子どもたち一人ひとりをどのように理解し、支援していくのか。

（３）どのようにして、集団の質を高めていくのか。

課題（１）にかかわるものとして、友だちのよいところを見つけ合う温かみのある学級づくりや話し合い活動の工夫によって、よりよい人間関係を構築し、お互いを認め合ったり、自己肯定感を高めたりするリポートが報告された。

課題（２）にかかわるものとして、子どもたちが主体的に活動することで自己指導能力を高める実践が報告された。また、問題を抱える子どもたちに対し、個々に応じて適切に支援し、自己有用感を高めることをめざしていくリポートも報告された。

課題（３）にかかわるものとしては、子どもたちが中心となって話し合い、活動の立案・実行までをしっかりと行うことができるよう、教員による支援をどのようにしていくのかを明確にしたリポートも報告された。

提出されたリポートから、以下のことについての必要性が確認された。

（１）望ましい集団をつくるために、どのような活動を展開していくのか。

（２）活発な話し合いのための支援をどのようにしていくのか。

（３）どのような目標設定のあり方がよいのか。また、活動の振り返りをどのように生活に生かしていくのか。

【中学校部会】リポート数 13 本

課題

（１）子どもの気持ちを大切にし、実態を正しく把握した上で、やる気を引き出し、自己存在感を味わわせるための支援のあり方。

（２）リーダーの育成や集団の質を高めるための支援のあり方。

（３）問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方。

子どもたちの自己存在感を味わわせるための支援のあり方では、各自に合う最適な目標設定のための工夫、挨拶活性化にむけた取り組み、オリジナルのＳＤＧｓを掲げた実践が報告された。討論では、よりよい人間関係づくりにおいて、教員が手本を示したり、意図をもってグループ編制したりするなど、教員の適切な支援が不可欠であること。さらに、ＩＣＴ機器を積極的に活用する必要性が話題となった。

集団の質を高める支援のあり方では、仲間づくりを核にした安心できる学級環境の構築やかかわり合いを深めることを通して自己の生き方を考える実践、主体的に行動できる子どもの育成の工夫､楽しい学校生活を目指した集団づくりについて報告された｡今回の討論では、子どもに委ねることと同時に、適切に個々の子どもを支援することで、初めて集団としての

質が高まるのではないかとの意見が出た。また、多くの参加者から学級目標を大切にする学級経営についても語られた。

問題行動の解決や予防のための家庭や地域との連携、コミュニケーション能力の育成とその支援のあり方では、周りの人を大切にできる子どもの育成、自己指導能力を高めるための工夫、ピアサポートを取り入れた人間関係の構築、ペップトークを活用した学級経営の成果が報告された。討論では、子どもの支援において、子どもが自信をもって活動するための場の設定の大切さが話題となり、実際に学級活動で積極的になってきたこと、自信を深めて行動が変容したことが子どもの姿から語られた。同時に、スモールステップの積み重ねや意欲が高まるゴール設定の重要性も話題となった。

提出されたリポートから、以下のことについて確認された。

（１）自他の良さに気付き、そのよさを生かして活動できる場や時間を確保して、子どもたちの自己存在感や自己有用感を育むための支援のあり方。
（２）リーダーの育成や集団づくりの中で子どもたちの主体性を育てたり、縦割り活動を生かしながら集団の質を高めたりする支援のあり方。
（３）問題行動の解決や予防のために、学校・家庭・地域のつながりを深める支援のあり方や、関係諸機関と連携して、子どもたち一人ひとりに対する支援のあり方。

小学校６年生　実践研究事例

「こうなりたい！！」という目標にむかって自ら取り組み、成長を実感できる児童の育成

１　実践のねらい

本校の子どもの様子を見てみると、無気力な雰囲気が漂っていることが気になった。また、自分から行動したり、新しいことに挑戦したりすることが少ないことや友だちどうしのかかわりが少なく、困ったときに友だちに助けを求めることが少ない様子も見られた。これは、子どもに「自分の心と向き合う力」「自分を高める力」「仲間とつながる力」が十分に育まれておらず、自分の理想がどんな自分なのかを考えて行動していないためだと考えられる。

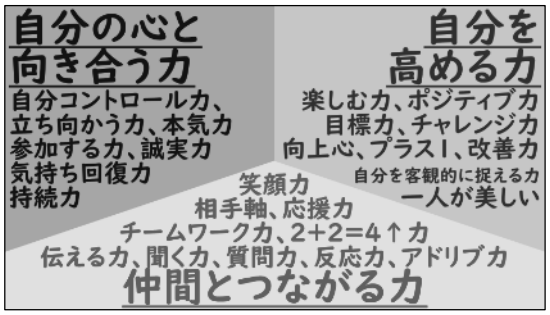
そこで、子どもがこの三つの力を高める意味を理解し、「三つの力を高めて成長したい」という思いをもたせていくことが必要だと考えた。また、この三つの力を活用して目標達成に向けた取り組みを行っていき、成長を実感できる子どもを育てていくことが大事だと考えた。そのため、次のような流れで実践に取り組んだ。

２　実践の方法

⑴　対象　６年生　33 人

⑵　基本的な考え

わたくしは、目標にむかって取り組み、成長を実感できる子どもを育てたい。成長を実感できる子どもとは、「自分の心に向き合う力」「自分を高める力」「仲間とつながる力」の三つの力を高めていき、理想の自分の姿に近づいていくことができる子どものことである。



【資料１　三つの力一覧】

「自分の心と向き合う力」とは、自分や周りのために、自分で自分をコントロールしたり物事に誠実に取り組んだりする力などである。「自分を高める力」とは、向上心や目標をもって新しいことにチャレンジしたり、自分の意見をもって行動したりする力などである。

「仲間とつながる力」とは、相手の立場になって考えたり、対話を通して考えを深めたりする力などのことである。（資料１）

本実践では、目標達成のプロセス（自分の理想像にむかって「計画を立てる」「実行する」「振り返る」「新しい計画を立てる」を繰り返すこと）をふませながら、三つの力を自分で高め、自分の理想像に近づかせていくことで、成長を実感できるようにする。

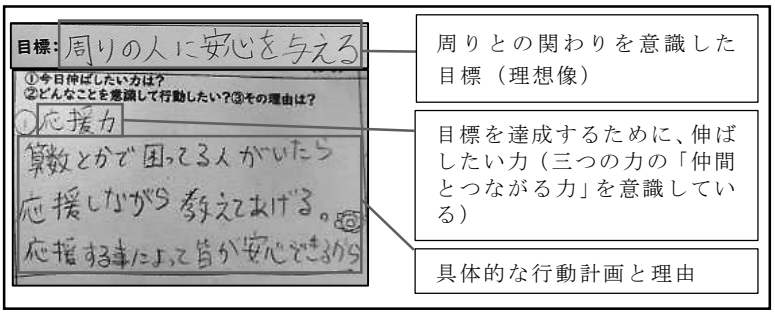
３　実践の内容

⑴　スーパーＡ計画書「目標の人に近づけた」

教員は、子どもたちが三つの力をもとに比較して行動することができるように、自分の理想とする姿は何なのかを考えさせ、今の自分から理想に近付くために必要なことは何かを考えさせた。

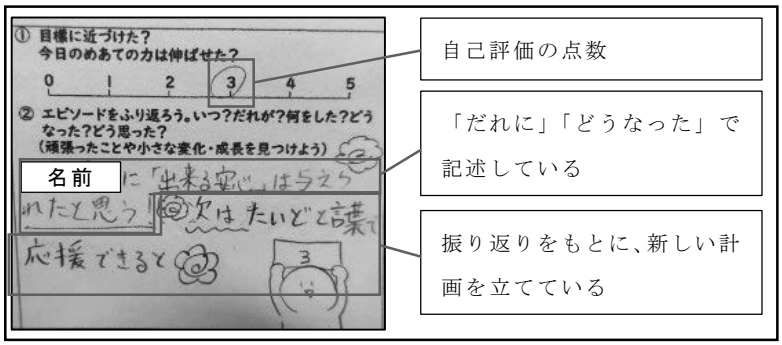
そして、決めた理想像をワークシートである『スーパーＡ計画書』の今週の目標に設定した。次に、「計画を立てる」活動では、目標に近づくために取り組みたいことを書いた。「周りを応援できるようになりたい」と答えたＡは、４月から数人の仲のよい友だちと話したり遊んだりしたが、それ以外の友だちとあまりかかわろうとしなかった。しかし、三つの力の意味を理解したことで、自分が高めたい力を「応援力」と設定し、目標を「周りの人に安心を与える」と設定することができた。そして、具体的な行動計画と理由もきちんと記述することができた。（資料２）

上記の目標を設定したＡは、算数の授業で隣の席の友だちに一生懸命問題の解き方を説明した。自分の理想像と理想像に近づくための計画を具体的に考えたことで、行動できたのではないかと考える。



【資料２　Ａの目標と計画】

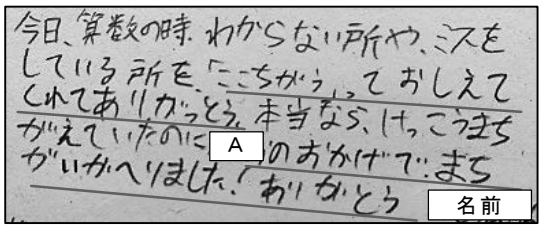
一日の活動を振り返る場面で、教員は子どもに「①今週の目標と今日の計画したことを読み返す」「②自分の一日を点数で振り返る」「③点数の理由を具体的に書く」ことを伝えた。また、最後に「④良かったところや課題を具体的に振り返ることが、次の成長につながる」ことも伝えた。Ａは振り返りを右記のように記述した。（資料３）



【資料３　Ａの振り返り】

この後、振り返りに対して、活動班の友だちとコメントを書き合った。

活動班３人のコメントが書かれた『スーパーＡ計画書』が手元に戻ってくると、どの子も笑顔でコメントを読んでいた。Ａの『スーパーＡ計画書』には、問題の解き方を教えてもらった友だちからの感謝の気持ちがたくさん書かれていた。（資料４）

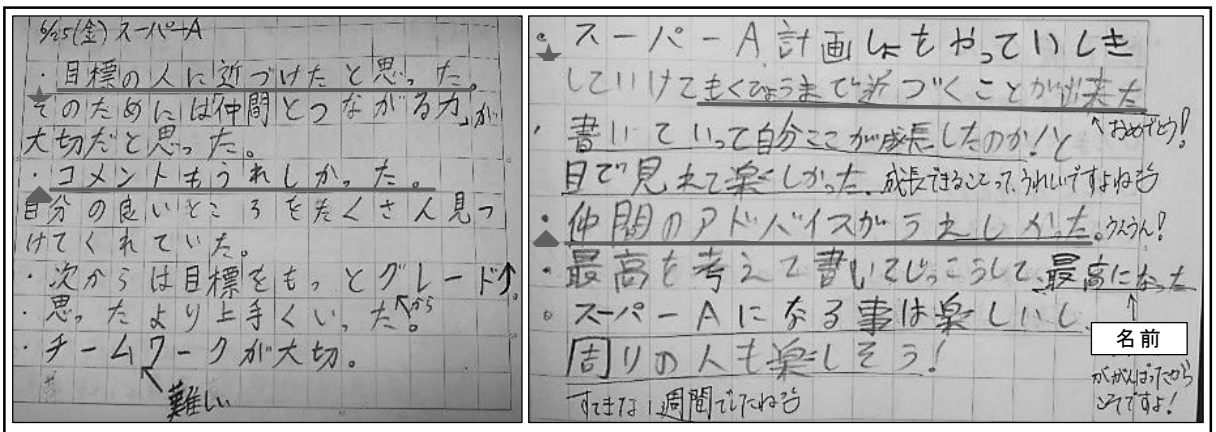


【資料４　友だちからのコメント】

この友だちからのコメントを受け取ったことで、周りの人に自分の高めたい力がどのような

影響を与えたのかを知ることができた。また、友だちからの励ましのコメントは、次の行動に対して「もっとみんなのためにがんばろう」や「自分の理想に近付いていこう」という気持ちを高めさせることにつながったと考える。

『スーパーＡ計画書』に１週間取り組んだ後に書いた感想では、自分が成長できたことや友だちから書かれたコメントがうれしかったと記述する子どもが多くいた。（資料５）



★　このように、「目標に近付けたこと」を記述した子どもは 26 人（79%）いた。
◆　このように、「友だちのコメントのうれしさ」を記述した子どもは 29 人（88%）

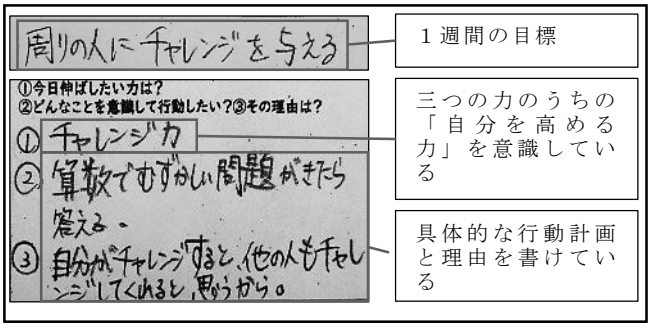
【資料５　『スーパーＡ計画書』に対する子どもの感想】

理想像にむかって目標達成のプロセス（「計画する」「実行する」「振り返る」の繰り返し）を１週間行ったことで、子どもたちが、「三つの力を活用したことで自分の理想に近づけた」と成長を実感することができた。しかし、子どもの多くは、高い自己評価を付けたことで満足して終わってしまい、三つの力をさらに高めていきたいという気持ちが薄れてしまった。そこで教員は子どもたちがより自分の理想に近づくために、振り返りの内容をもとに新たな計画をつくらせる工夫が必要だと考えた。

⑵　スーパーＡ計画書２「次は笑顔で話したい」

次の実践では、子どもたちが振り返りを次に生かすことができるよう、振り返りの欄に「プラス１するために、次は○○したい!!」と、書き込める欄を増やした。

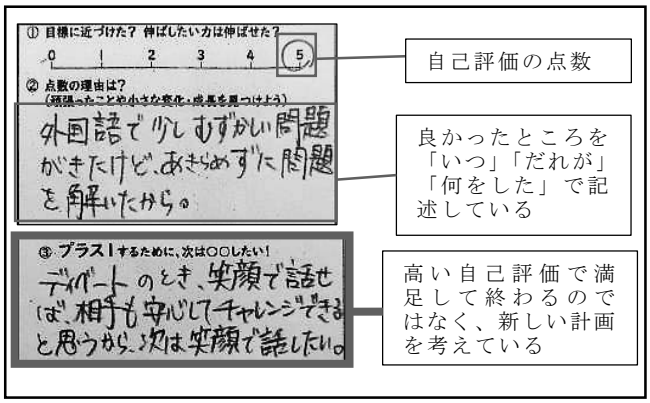
Ｂは「周りの人にチャレンジを与える人」という目標を立て、「算数で難しい問題がきたら答える」という計画を立てた。（資料６）



【資料６　Ｂの今週の目標と一日の計画】

残念ながら、予定していた算数ができなくなってしまった。しかし、これまでの実践を通して成長してきたＢは高めたい力の「チャレンジ力」を十分に発揮することができるようになっていた。Ｂは外国語科の授業で積極的に挙手をして発表したり、体育科のマット運動の授業で果敢にチャレンジしたりしていた。

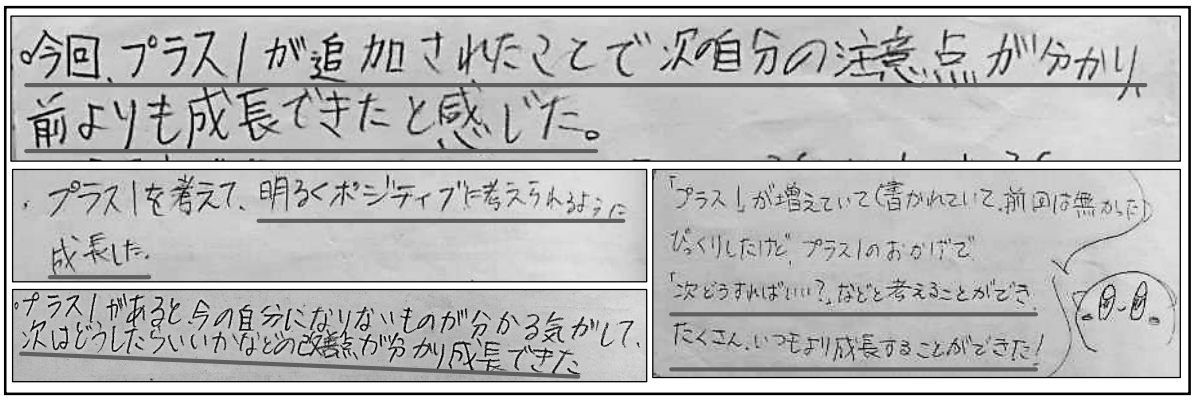
一日の取り組みを終えたＢは右記のように振り返った。（資料７）



【資料７　Ｂの振り返りとプラス１】

前回は、次の計画を立てることができなかったＢが、チャレンジ力を意識して行動できたことに満足して終わるのではなく、「笑顔で話せば、相手も安心してチャレンジできると思うから、次は笑顔で話したい」と次の新たな計画を設定することができた。

実践後、『スーパーＡ計画書』のプラス１に対する感想を書かせた。感想からは、子どもがプラス１のよさや自分の成長に気付けていることがわかった。（資料８）



【資料８　『スーパーＡ計画書２』を終えて、プラス１に対する子どもの感想】

このように、プラス１のよさを記述している子どもは 24 人いた。また、『スーパーＡ計画書』の１回目と２回目を比べると「振り返りのときに、次の計画を立てた回数」や「自己評価の点数」が増えた。（資料９）

	１回目	２回目
次の計画を立てた回数	23 回（14.1%）	117 回（74.5%）
自己評価の平均点数	4.0 点	4.2 点

【資料９　『スーパーＡ計画書』の１回目と２回目の比較】

４　おわりに

今回の実践を通して、多くの子どもが自分の三つの力が高まったことや理想像に近づけたことを実感して喜ぶ姿を見せるようになった。この実践を続けたことで、子どもの表情や声は明るくなっており、最初に述べた学級の様子とは比べものにならないくらい、授業で積極的に発言をしたり、隣の席の友だちと楽しそうな表情で話し合ったりすることができている。また、学級の活動や休み時間でも、子どもどうしがかかわり合いながら協力して過ごしている様子が増えてきている。

しかし、今回の実践を通して課題も見つかった。それは、自己評価の規準があいまいであったことである。これからも自己評価の方法について研究を重ね、目標にむかって取り組み、成長を実感することができる子どもの育成ができるよう、自己研鑽に励んでいきたい。

中学校１年生　実践研究事例

主体的に課題と向き合い、他者と協働し、よりよい集団をめざす生徒の育成
～中学１年生　学級会活動を通して～

１　研究概要

(1)　主題設定の理由

平成 31 年度全国学力・学習状況調査報告書によると、「学級みんなで話し合って決めたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがありますか」という質問に対して、「あてはまる」と回答している生徒の割合は、平成 29 年度から平成 31 年度で約 15 ポイント減少している。また、個人の権利が大切にされるようになったり、スマートフォンや SNS の普及が進んだりする中で、深く人と付き合うことや相互に助け合うことが減り、人間関係の希薄化を感じる。これらの現状をふまえると、学校教育の場で、よりよい人間関係を

築き、社会性を身につけていくことは大きな意義をもつ。子どもたちが、集団の中で多様な他者とかかわり、仲間から認められ自信をもつことは、現代の若者にとって必要なことであると考える。

このような社会の実態から、定期的に学級会を開き、よりよい人間関係を築いていく実践を行う。学級会では、教員が議題を与えるのではなく、生徒自らが議題を提案する。また、生徒一人ひとりが自分の考えをもって学級会に臨めるようにし、司会進行も生徒自身が行う。そうした学級会活動を通して、議題を自分事としてとらえ、仲間とともに一つの方向にむかって進むことができる学級集団にしていきたい。

(2) 目指す生徒像

・学級の課題を自分事として考えられる生徒
・自分や他者と折り合いをつけて話し合いができる生徒

(3) 研究の仮説

仮説１ 学級会の前に、個人の意見を考える場や議題を提案できる場があれば、生徒は学級の課題を自分事として考え、主体的に学級会活動に参加することができるだろう。

仮説２ 生徒自身が学級会の司会、進行を行うことで、折り合いをつけることや合意形成の難しさを経験でき、相手意識も高まり、協働的に課題解決にむかうことができるだろう。

(4) 仮説に対する手だて

仮説１に対する手だて

① 学級会「個人シート」を作成し、学級会の前に自分の思いや考えを記入することで、意見をもって学級会に参加できるようにする。

② 学級会の前に、司会団とともに「個人シート」に目を通し、朱書きや下線を入れたり、クラスメイトに声をかけたりして、学級全体が自信をもって学級会に臨めるようにする。

③ 学級に「議題カード」を配付したり、設置したりして、生徒が議題にしたいことを提案できるようにする。

仮説２に対する手だて

④ 司会、副司会、黒板書記、ノート書記で構成された「司会団」を組み、生徒自身で学級会の司会、進行を行う。

⑤ 「学級会進め方マニュアル」を作成し、学級会の進め方の基盤をつくる。マニュアルをもとに、生徒自身で司会、進行ができるようにする。

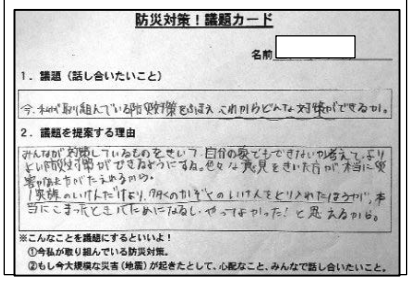
⑥ 意見がまとまらないときや話し合いの方向性がずれそうな場合は、司会団自ら相談の時間を設けたり、教員がメモで助言をしたりする。また、話し合いのポイントを生徒が見逃しそうなときには、教員が出て、議論するポイントを焦点化する。

２ 実践

(1) 学級会の準備

２学期半ば、よりよい集団をめざすべく、学級会を定期的に行うことを生徒に伝えた。これまでも学級会を行ってきたが、教員の準備不足や指導不足で生徒の成長の力になれていなかった。そこで学級全体に「議題カード」と「個人シート」について伝えた。「議題カード」は、配付を中心とし、設置もして生徒が話し合いたいことを提案できるようにする。（資料１）単に、話し合いたいことにするので

資料１：議題カード


防災対策！議題カード

名前

1．議題（話し合いたいこと）

今、私が取り組んでいる防災対策をもっとよくするにはどんな対策ができるか。

2．議題を提案する理由

みんなが約束しているものをもって自分の家でもできないか考えて、よりよい防災対策ができるかな。色々な意見をきいた方が本当に安全かもしれないから。
「実践のいけんたくさん」「みんなのかきてのいけんをとりいれたほうがいい」本当にこまったときに役にたつしやってよかった！と思えるから。

※こんなことを議題にするといいよ！
①今私が取り組んでいる防災対策。
②もし今大規模な災害（地震）が起きたとして、心配なこと、みんなで話し合いたいこと。

はなく、学級の成長につながる議題を募る。その議題カードをもとに、司会団で学級会の議題を決定する。「個人シート」は、学級会前に全員に配付をする。（資料２）

必要事項が記入できたら、一度司会団が全員分回収して個人シートに目を通す。その目的は、学級会の方向性を見通すため、朱書きや下線を入れ発言しやすいように支援するためである。振り返りや感想は、学級会後に記入する。

次に、学級会を円滑に取り組むためには、学級会の基盤づくりが大切であると考え、最初の司会団は教員が意図的に結成した。司会団５人の座席は、教室前方にし、司会を副司会とノート書記で挟む形にした。これは、司会と副司会が相談をしやすいこと、司会がノートをすぐに確認できることをねらいとしている。

資料２：個人シート

1年10組学級会　個人シート　名前（　　）

議題「クラスがどう変わったか、これからどう変われるか」　12月20日（木）

提案理由：1学期は何も知らなかった僕たちがいろいろ知ってクラス全体がどう変わったか、これからはどう変われるか話し合って高め合う。　提案者：

話し合いのめあて：普通にいつも発言している人は2回以上、苦手な人は自分から1回以上発言

自分のめあて：2回以上発言する

役割：司会　副司会　ノート記録　司会　副司会　ノート記録

話し合うこと	自分の考え・理由
①今までどういうふうに成長してきたか	・次の授業準備ができるようになった ・周りを見れる人が増えてきた ・しゃべれない物が見かけてくれる人が増えた
②これからどんなふうになりたいか	・最近は1分前着席ができていない人がいるから、もっと時間を見れるようになりたい
③そのためにどういうことをするべきか	その1分前という事とかに気づいた人が呼びかけれるなら呼びかけたり、気づいた人が呼びかけれないなら、友達に呼びかけてもらうなどをする

振り返り ○○△
① 自分のめあては守れましたか。（△）
② 自分の考えを進んで発表できましたか。（○）
③ 友達の意見をしっかり聞きましたか。（◎）
④ 提案理由やめあてを考えて話し合うことができましたか。（○）

役割・がんばりたいこと：自分が意見を言えない時でも人の意見をよく聞いて、それに対して、反応をしっかりする

感想：1学期の時からふり返ってみると良いところがたくさん見つかったので10組は成長していっているんだなと思った。自分で思っていることがあった時に意見が言えなかったので次の学級会では言えるといいなと思う。話し合いの時間をとる時に何を話あうかをはっきりさせておけばよかった。話しあいを進めすぎなかった。1番が2番の

次に、学級会を円滑に取り組むためには、学級会の基盤づくりが大切であると考え、最初の司会団は教員が意図的に結成した。司会団５人の座席は、教室前方にし、司会を副司会とノート書記で挟む形にした。これは、司会と副司会が相談をしやすいこと、司会がノートをすぐに確認できることをねらいとしている。

最後に、司会団とともに「学級会の進め方マニュアル」をもとにしながら司会、進行の流れを確認する。進め方をマニュアル化することで、形式的な部分は効率よく取り組ませて時間を短縮し、話し合いたい内容に多くの時間を充てるようにした。また、話し合いの決定までの進め方を身につけさせることをねらいとした。そして、司会団が困ったときの「相談タイム」のとり方や多数決のとり方についても説明をした。

(2) 学級会を開く

議題カードを集め、司会団と教員で議題を選んだ結果、１回目の学級会の議題は、「学級がどう変わってきたか、これからどう変われるか」となった。この議題を選んだ理由は、「学級の成長したところならみんなが発言しやすいこと」「２学期の学級のまとめになる議題や３学期につながる議題になる」と考えたからである。そして、話し合うことは、「①今までどういうふうに成長してきたか」「②これからどんなふになりたか」「③そのためにどういうことをするべきか」となった。

資料３：生徒Ａの「自分のめあて」

自分のめあて	話し合いをスムーズに進める。

初めての学級会ということもあり、相手意識はまだ感じられない。

１回目の学級会で司会を担当することとなった生徒Ａは、「相手意識を高めたい」と考えており、自分のめあてを、「話し合いをスムーズに進める」と設定した。また、設定した理由としては、まだ相手意識は感じられないからとした。（資料３）

学級会が始まると、①の議題では、普段あまり発言ができない生徒も発言をすることができた。これは、司会団の議題の選定や個人シートの事前記入が有効であったことを感じた。そして、「進んで意見を言えるようにしたい」と設定した生徒Ｂは、自分の意見を言うことができた。しかし、この議題に時間を使いすぎたために、②、③の話し合いの時間が少なくなってしまった。今後は、意見を出すところは短く、考えをすり合わせていくところは長くできるように教員が支援をしていく必要がある。

②の議題では、「メリハリを付けて行動」と「言われる前に行動」の二つの意見が出た。その際、積極的に意見を述べる生徒のみの時間になってしまい、生徒Ａが戸惑っていた。そこで教員は、司会団に相談タイムを活用するよう伝え、打ち合わせをした。「『○○さんの意見に賛成です』という発言が増えると、学級が進みたい方向の話し合いになるよ」と助言をした。それを司会団が学級に伝えると、多くの生徒から「言われる前に行動の方がはっきりして分かりやすいので賛成です」「言われる前に行動に賛成です。理由は、今 10 組の弱いところだからです」という意見が出て、②の話し合いを決定することができた。

(3) 総合を議題にした学級会を開く

本学級では、総合的な学習の時間では「防災」について取り組んでいる。今後、どのように学習を進めていくかを考えている最中であったため、議題カードで話し合える内容がないかを募った。すると、「みんながどんな対策をしているかを知り、自分たちの対策に生かしたい」という意見が出たため、学級会を行うことにした。

議題は「今私が取り組んでいる防災対策をふまえ、これからどんな対策ができるか」となった。話し合うことは、「①実際に災害が起きたときに困りそうなこと」「②今やっている防災対策、これからできそうな防災対策」「③今後クラスとして取り組むことを決める」となった。事前に、個人シートを見た結果、学級で「学校避難マップ」「学校危険エリアマップ」のようなものを作成する方向で話し合いが進む見通しを立てた。生徒Ａの自分のめあては、「みんなの反応をよく見て進める」であった。学級の理解度や雰囲気を感じながら進行しようという意識が伺え始めた。（資料４）

資料４：生徒Ａの「自分のめあて」

自分のめあて	みんなの反応をよく見て進める

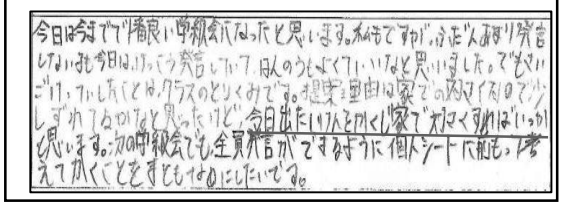
クラスメイトの様子を見ながら進行しようというめあてから、相手意識の芽生えを感じる。

学級会が始まると、司会団が、事前に個人シートの内容でポイントとなる部分に下線を引いたことで、前回以上に積極的に自分の考えを発表する姿が多く見られ、全員発言をすることができた。話し合いは、ハザードマップや避難経路が分かるマップをつくる方向で進んでいたが、最後に「防災グッズをつくる」という意見が出て、２つの内容で学級会が終わる形になった。

今回、２つの内容による話し合いになった要因の一つは、板書の仕方にあった。なぜなら学級全員で考えを発表し、多くの意見が出たことで、その意見を書くことに精一杯になり、一つの方向に話し合えるような板書が上手にできていなかったからだと考える。そこで、教員は司会団の生徒に、似たような意見には同じ色チョークで線を引いたり、枠で囲ったりと可視化させることで話し合いがどんな方向で進んでいか理解することができるのではないかということを助言した。そして、次の学級会では、司会団が板書の仕方を工夫して可視化させるよう取り組んだ結果、『家庭での防災対策』から『学級でこれから取り組む防災対策』の方向で決定した。しかし、提案者は『クラスメイトの防災対策を聞いて、各家庭に取り入れる』という内容で決定したかった思いもあったため、今回の決定をどのように感じているか心配になった。

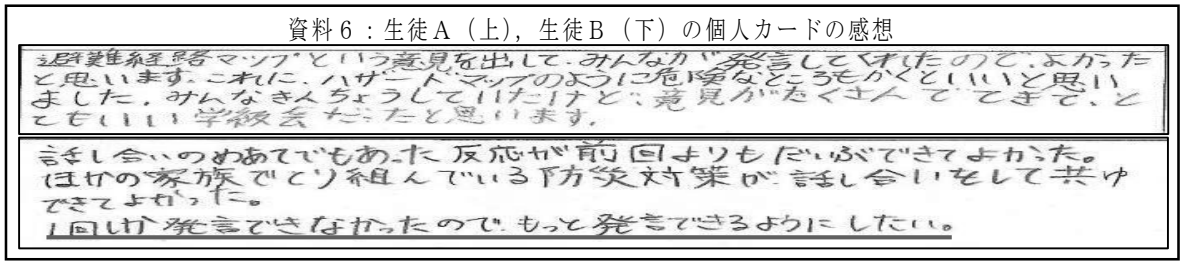
話し合い後の感想では、提案者は、学級で決めたことを各家庭で実践すればよいという記述が見られた。（資料５）もともと提案者は自分の思った通りに進めたい考えの持ち主にあったが、学級会を経験していく中で、自分の考えに折り合いを付けて柔軟に対応することを学んでいることが伺えた。

資料５：提案者の感想


今日は今までで一番良い学級会だったと思います。私もですが、ふだんあまり発言しない人も今日はいっぱい発言していて、自分のうでをよくていいなと思いました。でもいっぱいでけっかしたことは、クラスのとりくみです。提案理由は家での防災グッズなので少しずれてるかなと思ったけど、今日出たいいんとかくし家でためすのはいいかと思います。次の学級会でも全員発言ができるように個人シートに前もって考えて書くことをきちんとしたいです。

生徒Ａの感想からは、前向きな感想が見られ、よりよくしていくための自分の考えも書いている。生徒Ｂの感想からは、次回の学級会に向けて積極的に発言をしたいという気持ちの表れが見えた。（資料６）

資料６：生徒Ａ（上），生徒Ｂ（下）の個人カードの感想


避難経路マップという意見を出して、みんなが発言してくれたので、よかったと思います。これに、ハザードマップのように危険なところもかくといいと思いました。みんなきんちょうしていたけど、意見がたくさんでてきて、とてもいい学級会だったと思います。

話し合いのめあてでもあった反応が前回よりもだいぶできてよかった。
ほかの家族でとり組んでいる防災対策が話し合いをして共ゆうできてよかった。
1回は発言できなかったのでもっと発言できるようにしたい。

(4) １年のまとめとなる学級会を開く

学級会の基盤が整ってきたため、司会団を変更した。その司会団から「お世話になった先生方に思いを伝えるために何ができるか」という議題で話し合いたいと提案があった。生徒Ａは初めて一般で参加した。生徒Ａのめあては、「もらう人のことを考えた発言する」であった。感謝を伝える先生のことを考えためあてであり、学級会を通して生徒Ａの変容が伺えた。（資料７）

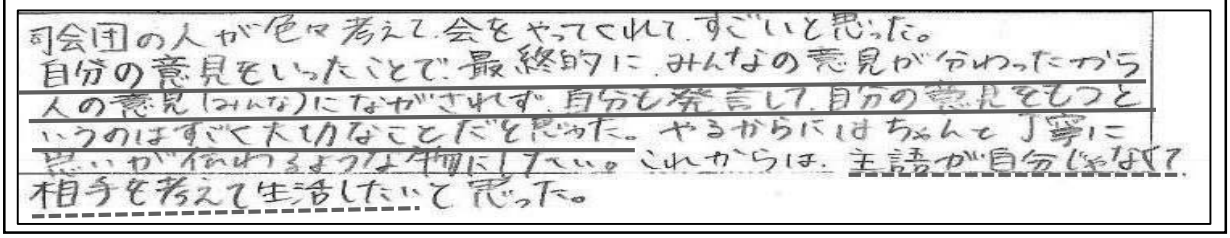
資料７：生徒Ａの「自分のめあて」

もらう人のことを考えた発言をする

思いを伝える相手側のことを考えており、生徒Ａの変容が伺える。

学級会では、「どんなことをするのか」で議論になった。「最後の授業でお礼、歌を歌う」「手紙を渡す」などの案が出た。３月７日で授業終了まで時間がなかったため、「最後の授業でお礼を言う」の内容で決定しつつあり、多数決を取っても約９割が賛成であった。しかし、生徒Ｂともう１人の生徒のみ手をあげなかった。ここで司会が２人に多数の意見で納得できるか確認をした上で、教員も重ねて尋ねた（少数派意見の確認）。すると、「時間がないと言っていたら何もできないと思う」と意見を述べた。この意見から、自分たちの都合だけで話を決めてはいけないということに気付き、「手紙に感謝の気持ちを書いて渡そう」という意見が多数になった。しかし、一部生徒は「多数決で決まったから変えてはだめだよ」と言った。なかなか内容が決定できない状況であったが、司会団が「今発表した意見も取り入れた上で、多数決を再度してみては？」と言った。本来のルールからは脱線する形となったが、生徒Ｂの意見によって学級全体で大切なことは何かを気付く学級会となり、教員による助言もあって「手紙を渡す」の内容に決定した（資料８）。

資料８：生徒Ｂの個人カードの感想


司会団の人が色々考えて会をやってくれて、すごいと思った。
自分の意見をいったことで、最終的に、みんなの意見が分かったから
人の意見（みんな）にながされず、自分も発言して、自分の意見をもつと
いうのはすごく大切なことだと思った。やるからにはちゃんと丁寧に
思いが伝わるような物にしたい。これからは、主語が自分じゃなくて
相手を考えて生活したいと思った。

３　仮説の検証と課題

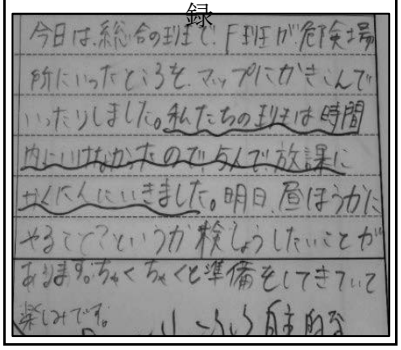
仮説１に対する手だて

① 個人シートを記入することで、発言が増えた。ほとんどの学級会で全員発言を達成することができた。

② 個人シートに下線や朱書きをすることで、発言を苦手としている生徒も発言ができるようになった。

③ 生徒が議案を提案することで、より自分事として考えられた。さらに、毎日書く「生活の記録」からも主体的に自分たちで立てた課題に向き合えていることがわかった。（資料９）。

資料９：生徒の生活の記録


今日は、総合の班で、F班が危険な場
所にいったところを、マップにかきこん
いたりしました。私たちの班は時間
内にいけなかったので、夜で放課に
せくに人にいきました。明日、昼ほうかた
やることというか、相しょうしたいことが
あります。ちゃくちゃくと準備をしてきていて
楽しみです。

仮説２に対する手だて

④ 司会団が提案したり、少数派の意見を確認したりするなど、主体的に取り組めている。

⑤ 学級会の進め方をマニュアル化することによって、効率よく話し合いが進められた。

⑥ 随所で教員が出ることはとても大切だとわかった。教員が司会団に助言したことで、話し合いが一つの方向で進んでいくこともあった。

課題としては、話し合うべき内容についてもっと時間を充てることができたのではないかという点である。今後は、タブレット端末を用いて、個人シートを事前に「協働学習支援ツール」などで共有しておけば、議論するべき部分に多くの時間が充てることができると考える。

Ⅳ　おわりに

1　明らかになったこと

現在の子どもたちは、自分の力を十分に発揮する機会が失われたり、将来の夢や希望を見出すことができなくなったりしている。また、不登校問題やいじめの問題も増加傾向である。このような課題を克服するために、自治的諸活動と生活指導部会では、「たくましく生きる子どもを育てよう」をテーマに実践研究に取り組んできた。また、「協働を通した人とのかかわりや学びへの追究」についても検討を重ねてきた。その結果、以下のような重要性が明らかになった。

○　子どもの気持ちの背景にあるものや発達段階をふまえ、実態を正しく把握したうえで活動内容を考え、子どものやる気を引き出す支援を行っていくこと。
○　地域と学校間の連携をふまえて、集団の質を高めるための活動を行っていくこと。
○　集団生活の中で、子どもどうしのかかわりを大切にし、リーダーの育成や集団の質を高める支援を行っていくこと。
○　問題行動の解決や予防を図るために、家庭や地域との連携を大切にしたり、子どものコミュニケーション能力を育成したりしていくこと。

以上のことから、教員は子どもたちが将来たくましく生きる姿を見据えて、子ども一人ひとりの気持ちを考え、実態にあった働き掛けを行っていくことが重要であることを確認することができた。

2　来年度への課題

今年度の自治的諸活動と生活指導部会では、たくましく生きる子どもを育てるために学習タブレットを活用したものや、学級力を高める取り組み、多様性を考えた関係諸機関と連携した取り組みなど、多岐に渡るものであった。

今後も子どもが成長しながら歩み続けることと同じように、教員も成長の歩みを止めることなく研究と実践にむけて研鑽に励んでいくことが必要だと考える。

次年度のリポートについては、今年度のリポートで課題となった、「子どもの実態を正しく把握した活動内容のあり方」、「集団の質を高める支援のあり方」、「問題行動の解決や予防をするために家庭・地域との連携とその支援のあり方」などについて、子どもたちがたくましく、そして安心・安全に生きていくことができるよう、日々目の前にいる子どもたちのことを考えた粘り強い取り組みが期待される。

最後に、正会員の方々および、お取り組みいただいた各分会・各単組の方々に、紙面をお借りしてお礼を申し上げるとともに、ここに掲載した小中学校の実践研究例を「たくましく生きる子どもを育てる」ためのご参考にしていただければ幸いである。